

Title	批判理論に依拠した形象論 : シュヴェッペンホイ ザー父子を中心に
Author(s)	原, 千史
Citation	形象. 2016, 1, p. 78-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75785
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 批判理論に依拠した形象論

# -シュヴェッペンホイザー父子を中心に-

はじめに

形象をめぐる考察が、それを正統に継承しつつも独自の視点 では、ベンヤミンやアドルノらが展開した批判理論における 要があるのではなかろうか。こうした問題関心のもとに本稿 後なされうるのかについて、ここで今一度再検討してみる必 らこれまでにいかなる寄与がなされてきたのか、あるいは今 意外と知られていないのではなかろうか。批判理論の立場か の初期段階より形象をめぐって思考を積み重ねてきたことは チがなされていないかのような印象を受ける。批判理論がそ り、批判理論に依拠した形象論からは未だ積極的なアプロー 論や現象学に依拠する形象論が先行して議論を展開してお 昨今の形象をめぐる様々な言説において、ドイツでは記号

> 場からシュヴェッペンホイザー父子が発表した論考を中心に 行っているかを、ここ十年ほどの間に批判理論を継承する立

据えて見てゆきたい。

一.ヘルマン・シュヴェッペンホイザー(一九二八~

二〇一五)による形象論

世界大戦末期には徴兵年齢に満たない十七歳で高射砲部隊補 後にはホルクハイマー、アドルノのもとで哲学を修めた。そ フルト大学に入学後、 助員として動員され、終戦を迎えている。出身地のフランク ンホイザーについて、まず始めにその経歴を略述しておく。 一九二八年フランクフルト・アム・マインに生まれ、第二次 二〇一五年四月に八七歳で没したヘルマン・シュヴェッペ 始めはハンス=ゲオルク・ガーダマー、

き継がれ、今日の形象をめぐる言説においていかなる寄与を を採り入れる後の世代の研究者たちにいかに発展的な形で引

原

千史

13

かけて編纂した『ヴァルター・ベンヤミン全集』が挙げら

ト」とも呼ばれる批判理論の一拠点に変え、彼の門下からはにすぎなかった小都市リューネブルクを「北のフランクフルにすぎなかった小都市リューネブルク大学と改称され、以後哲学科にすぎなかった小都市リューネブルク大学と改称され、以後哲学科にすぎなかった小都市リューネブルクを「北のフランクフルト大学客員教授にすぎなかった小都市リューネブルクを「北のフランクフルト大学客員教授にすぎなかった小都市リューネブルクを「北のフランクフルにすぎなかった小都市リューネブルクを「北のフランクフルにすぎなかった小都市リューネブルクを「北のフランクフルにすぎなかった小都市リューネブルクを「北のフランクフルート」とも呼ばれる批判理論の一拠点に変え、彼の門下からはにすることでは、

論の要請でもあるラディカルな啓蒙、徹底した自己反省と反ト学派第一世代が展開した批判理論を正統に継承し、批判理線を画し、ホルクハイマーやアドルノら所謂フランクフルシュヴェッペンホイザーは一歳年下のハーバーマスとは一リューネブルク学派といわれる研究者たちが輩出している。

出二〇〇四年) (1) である。

友人のロルフ・ティーデマンとともに一九七二年から九九年通じて啓蒙に精力的に取り組んできた。主たる業績としては、て、師のアドルノと同様に講義や講演・シンポジウムなどをム的心性からの脱却が遅々として進まない戦後ドイツにあっ省性に固執し、理論面のみならず実践面においても、ナチズ

「批判理論における弁証法的形象概念と『弁証法的形象』」(初上二篇の論考が収められており、その中の一篇が以下で扱う年)はヘルマン・シュヴェッペンホイザーによる形象論の年)はヘルマン・シュヴェッペンホイザーによる形象論の年)はヘルマン・シュヴェッペンホイザーによる形象論の年)はヘルマン・シュヴェッペンホイザーによる形象論の年)はヘルマン・シュヴェッペンホイザーによる形象論の年、はヘルマン・シュヴェッペンホイザーによる形象論の論考察をめぐらせ、数々の論考を発表している。それらの論考察をめぐらせ、数々の論考を発表している。それらの論考を基に改訂を表している。特に晩年の二十年ほどは視覚と形象について活発に考れる。特に晩年の二十年ほどは視覚と形象について活発に考れる。特に晩年の二十年ほどは視覚と形象について活発に考れる。

最も端的に示している論考であり、以下にその概略を述べる。 とれた哲学会大会での講演原稿に由来し、その後二〇〇三された哲学会大会での講演原稿に由来し、その後二〇〇三された哲学会大会での講演原稿に由来し、その後二〇〇三された哲学会大会での講演原稿に由来し、その後二〇〇三された哲学会大会での講演原稿に由来し、その後二〇〇三された哲学会大会での講演原稿に由来し、その後二〇〇三された哲学会大会での講演原稿に由来し、その後二〇〇三された哲学会大会での講演原稿に由来し、その後二〇〇三

## 先ずシュヴェッペンホイザーは、批判理論に特徴的な認1 思考と直観あるいは概念と形象に見られる相関性と相補性

識 ぱら概念による悟性的認識が重視され、 の様態を取り上げる。 従来、 哲学的認識においてはもっ 形象による感性的

で批判理論はこの両者を弁証法的に関係づけ、 直観はむしろ等閑にされるか、副次的に扱われてきた。そこ 事柄の把握

よる思考と形象による直観のそれぞれの限界を批判的に規定 し、言語の論理性を過度に強調することや、逆に言語の形象

あると考える。

批判理論は自己反省と批判を通じて、概念に

的かつ相補的な関係にあり、

や認識においては、

形象による直観と概念による思考は相関

考えられる。

いずれもが本質的な構成要件で

性に過大な要求をすることをいずれも拒否する。有限者と無

出してシュヴェッペンホイザーは、概念と形象との差異や断 限者を分数の関係のもとに説明したシェリングを引き合いに

際立たせる。 絶を強調するというよりもむしろ両者の相関性や連続性を 事柄の認識と知覚は、概念においても形象に

を提示する形象という、 明示する概念、ならびに事柄の解釈されるべき眺め Anblick て、間接的になされる。事柄の意味 Bedeutung を論理的に おいても両者に共通する言語(概念の場合は言葉という言 Wortsprache 形象の場合は非言語的言語)を媒介にし アンビヴァレントな関係にある両

者に対して批判理論は、

観察的思考 betrachtendes Denken

では決して許されない事柄の多義性はむしろ望ましいものと Physiognomie とも近しい関係にある批判理論に特徴的なこ の類比的・弁証法的思考にとって、形式論理に囚われた思考

念と事柄は分かちがたく結合していると同時に事柄の具体性 論は「名 Name というユートピア」に見出す。 Mischfiguren として現れる。そうした認識の理想を批判理 された否定 bestimmte Negation によって配合した混合形態 考は相補的な関係にあり、 以上のように批判理論においては思考的直観と直観 認識は概念と形象の両者を限定 名において概 的

や直観性も保たれており、 概念と直観された事柄とが内的に

通じているからである。

2 批判理論における弁証法的形象概念

に捉えることを重視する。そこでまず限定的否定の対象とな 形象全てを肯定的に捉えてはおらず、形象を批判的・否定的 関与する。自己反省と批判を主軸とする批判理論においては 形象は上で見たように概念との相補的関係において認識に

るのが模写・模像 Abbild としての形象である。ただ事実と

観相学

こそが認識の対象である事柄に相応しいと考える。

判理論はその初期より終始一貫してこれに批判を加えてい す像 Deckbild としてリアリズムが多用する形象であり、 を隠蔽しその認識を妨げる模像は、 されるものを複写するだけで、実在の表現である原像 Urbild 現実の深層構造を覆い隠 批

く

る。

る。

して似姿 Ebenbild や鏡像 Spiegelbild も取り上げ、こうした

さらにシュヴェッペンホイザーはこれに類した形象と

Wahrbild と幻像 Wahnbild との区別が無効となり、 的機能を果たしている点を批判する。そこでは事柄の真の像 義に由来する創造性のイデオロギーに加担して欺瞞的 形象が人間の創造力・天才を神の属性の反映とみるロマン主 現実と 歪 #

仮象との取り違え Quidoproquo が起きているからだ。 さらに道徳的行動の指針としての模範 Leitbild, Vorbild に

差しを向ける。 となる)をもたらすものとして模範という形象にも批判的眼 して従順で無批判な心性(それはファシズムを醸成する下地 対しても批判理論は反省を加え、 権威を求めたがり権威に対

るものか。 Schein や出現 apparition といった概念である。本質と存 以上のように形象の様々な類概念に限定的否定を加えた上 批判理論が堅持する弁証法的な形象概念とは一体いかな それは いずれも現象 Erscheinung に関与する仮

> ある。それは実験に似た認識であり、モデルとしての断章や るのがアドルノの言う布置的思考 konstellatives Denkenで 形象とは、 在は仮象において現象する。 またそうした仮象を解釈 deuten する際に不可欠とされ 本質や存在を開き示す仮象 apophantischer Schein であ 幻影 Phantasmagorie として人を欺く仮象ではな 批判理論にとって最も重要な

### 「弁証法的形象 dialektisches Bild」という概念

エッセーこそ、そうした認識に相応しい叙述スタイルとなる。

3

もち、 知覚、 Traumbild とも言われ、 ンホイザーの言葉通り、批判理論の中でも今日までその定 意識あるいは無意識 の領域に由来し、 義に関しては論議の的になってきた。弁証法的形象は特殊な 意識の所与、 ベンヤミンに由来するこの概念については、 個別的主体の記憶内容として自我の意識または無意識 個々の主体あるいは集団的主体の構想力にその起源を 事実」あるいは意識的に想像されたものとも 集団的主体の場合は間主体的に共有され の記憶の痕跡と考えられる。 無意識的に現前し主体に降り懸かる シュヴェ 夢 の形象 ッペ

構築を主張したアドルノに対して、ベンヤミンは意識に事実

夢・記憶に現れた真正な客観的歴史像の弁証法的

言われる。

として与えられた形象のうちにあるショックや異化効果を及

ある弁証法的形象は個々のまたは集団の主体に危機的な状況 ぼす形象要素 Bildelement に固執した。真正な歴史的形象で

態は静止した弁証法 Dialektik im Stillstand とも呼ばれ、そ で閃き、その光が輝き出す瞬間に歴史を静止させる。その状

ヤミンは考える。

字で表現された言語を翻訳しうる者こそ真の歴史家だとベン こに現れる歴史的形象という文字 Schrift を解読し、この文

二.ゲルハルト・シュヴェッペンホイザー(一九六〇~)に

よる形象論

次に、ヘルマン・シュヴェッペンホイザーの子で、近

年形象に関する論考を集めた単著『形象の障害と反省

Bildstörung und Reflexion』(二〇一三年)を刊行したゲル

の著者で知られる社会学者シュテファン・ミュラー=ドーム 紹介したい。批判理論を継承する世代としては『アドルノ伝』 ハルト・シュヴェッペンホイザーについて簡単にその経歴を

(一九四二~) よりも若い世代に属すゲルハルト・シュヴェッ

セル、ヴァイマル、ドレースデンなどの各大学で教鞭を執っ カッセル大学で教授資格を取得している。ハノーファー、カッ め一九九二年同大学で哲学の学位を得た後、二〇〇〇年には た後、二〇〇二年以後はヴュルツブルク・シュヴァインフル

に生まれ、ハンブルク大学で哲学、ドイツ文学、教育学を修

ペンホイザーは、一九六〇年フランクフルト・アム・マイン

kritische Theorie』には刊行当初から編者として携わり、 ドルノ――解放の弁証法』(徳永恂・山口祐弘訳、作品社 在もなお刊行を続けている。日本では彼の著書として『ア リューネブルクで創刊された『批判理論雑誌 Zeitschrift für ケーションおよびメディアについて講じている。一九九五年 ト応用科学大学造形学部の教授としてデザイン、コミュニ

篇の論考の一つ「形象の非同一性 批判理論の形象概念につ いて」(②)を取り上げる。この論文は二〇〇九年ヴッパーター 本稿では上記『形象の障害と反省』に収録されている十一

二〇〇〇年)が刊行されている。

考、つまり二〇一〇年『文化哲学雑誌』第四巻第二号に掲 載された「批判理論の形象概念についての考察」、および同 ル大学哲学研究室で行った講演を元にして書かれた二篇の論

年に刊行されたS・ノイバーらによる編著『思考像としての

ホイザーが考察してきたことを総括する質量共に最も充実し である。それまで批判理論の形象論についてシュヴェッペン アドルノの形象概念について」を元に加筆修正を加えたもの 形象 Das Bild als Denkfigur』に寄稿した「形象の 非同 性

な位置を占めている。

この論考は内容に即して以下の三つの部分に大別すること

た論考で、今日の批判理論に依拠した形象論を知る上で枢要

できるのかを論じた部分である。 まで用いられてきた形象概念を整理して再構成した中心的部 プローチとその問題点を概観した部分、次に批判理論でこれ ができる。すなわち、 そして今日の形象論において批判理論はいかなる寄与が 形象をめぐる今日の様々な理論的ア

### 1 今日の形象をめぐる議論の盲点および様々な理論に依拠

とが企図される。

観点を導入することで、形象概念をめぐる議論に寄与するこ

となっていることが確認される。 メージをめぐる現象はもはや伝統的形象概念では把握不可能 閑にしてきた」という美術史家の言葉が引かれ、 する形象論 冒頭で「美術史は現在の状況に即した形象概念の展開を等 そうした昨今の状況に対し 今日のイ

批判理論からのアプローチはほとんどなされていないと

らず、また批判理論に独自の方法、つまり定義に現象を従属 概念の狭隘な捉え方に対して、批判理論に依拠した社会学的 こで本論考では昨今の形象論にみられる盲点ともいえる形象 洞察を提示する際には相応の一貫した連関が要求される。 抑圧に抗する批判理論に対しても、 にあると考えられる。分析と批判の統合を要請し、体系性 させるのではなく、現象をして自らを語らしめるそのやり方 ルクハイマーらにおいて、美学はもとより歴史哲学、 て周縁的であるどころか、むしろアドルノ、ベンヤミン、 シュヴェッペンホイザーは断じ、形象概念が批判理論にとっ いる事実を鑑みれば、 首尾一貫した理論を基礎にした形象概念が確立されてお 知覚論・認識論において頻繁に形象への言及がなされ 奇異に映ると述べる。その理由の一端 内在的批判を通して得た 文化批

は、

判

概念は多義性を排除するためにも限定して「絵画的方法で何 よるイメージの五分類を挙げて、美学での議論において形象 iconic turn のパイオニアといえるW・J・T・ミッチェルに かに形象概念を捉えてきたかを略述する。文化学における シュヴェッペンホイザーはまずこれまで様々な理 論 が

表現 Darstellung も形象には含まれるゆえに「何かを視覚的 た哲学の議論においては、知覚や表象はもとより何かの描写・

かを再現する形成物 Artefakte」とすることを提唱する。

ま

形象とは「現にある姿 was sie sind」にとどまらず「あり得

定する。 に visuell 再現表象する支持媒体と結びついた形成物」と規 記号論では言語表現との類比の下に形象を図像的表現とし

えられている。このように今日、 sichtbare Gegenstände であり、実在を可視化するものと捉 は限らないというところから出発し、形象とは可視的対象 して現象学においては、形象が必ずしも何かの記号であると べて内的関係性もさほど規定可能とは言いがたい。これに対 たる記号体系の一部分にすぎず、さらに言語的記号体系と比 て解釈することが目指されるが、 形象をめぐる哲学的議論は 形象はそこでは多岐にわ

#### 2 批判理論における形象概念

大きく二つの立場に分かれ、互いに排斥しあっているという。

ずしも明瞭に認識しうるとは限らないと断った上で、その特 象概念について、多層的で内的対立をはらんでいるために必 シュヴェッペンホイザーは批判理論にも確かに存在する形

徴を次のよう定式化している。すなわち、批判理論における

張をはらんだ非同一性の本質がある、と。 の次元と可能性の次元との差異のうちに、形象にみられる緊 る姿 was sie sein können」でもあり、視覚的なものの現在

以上のように批判理論における形象概念の全体的特徴を述

る形象概念を以下の五つの観点から考察する。まずはホルク べたのちにシュヴェッペンホイザーは、批判理論で扱われ ハイマー/アドルノにおける「美的形象」概念であり、 次に

「投影像 Projektionsbild」、最後に文化形成おける反復強迫 らに『啓蒙の弁証法』中の反ユダヤ主義の理論で用いられた 的形象」、そしてアドルノによる「形象批判 Bildkritik」、さ ベンヤミン、アドルノにおける叙述的性格をもった「弁証法

Wiederholungszwang に着目するクリストフ・テュルケにお いて中心的役割を演じる形象概念である。 美的形象 ホルクハイマーは何よりも現実を異化する

1

作用を美的形象に見出そうとする。美的形象は可能な別の

る。 象的なものから解き放たれていないゆえに楽音に比べて限定 する社会に対する個人の抵抗の源泉となりうることを強調す 状態への希望を投影しており、疎外されて偽りに満ちた現存 これに対してアドルノは形象による異化効果の力は、対

象の理解の差異、すなわち突如としてショックとともに主体

したい。ここでもベンヤミンとアドルノにおける弁証法的形 解説との重複部分が多いので詳説は避け、 ル 2 どの文学的または音楽的形象を念頭に置いている。 視覚的形象というよりはむしろベケットやシェーンベルクな 存するものとは違うものの暗号と言えると述べ、その際には Untergangs、全面的破局の可能性の形象だけが新たな、 機は芸術をさらに形象放棄へと追いやる秩序的合理性に対 り続ける。その一方でミメーシスという魔術的・前合理的契 然支配を行う合理性が自然の抑圧という盲目的契機を宿して 法が内在している。ミメーシスと合理性の弁証法である。 となるからだ。しかし宥和の形象としての美的形象にも弁証 的形象はその現象の際に現存するものを超えたより以上のも る模写に対してそれらが現象する際の形象性を擁護する。 してその正当性を保持する。アドルノは没落の形象 Bild des いるかぎり、芸術作品における合理的構成は暴力的関係であ マン・シュヴェッペンホイザーによる「弁証法的形象」の 決して存在したことのない原像へのユートピア的先取 論述的な「弁証法的形象」 これについては上述 要点のみを略述 0) 自 現 美

されているという。むしろアドルノは自然美や芸術美の単な

に降りかかる(ベンヤミン)のか、それとも主体による反省を経た構成として生ずる(アドルノ)のかという差異が強調されている。いずれにせよ歴史的形象が問題となり、概調されている。いずれにせよ歴史的形象が問題となり、概が瞬間的に結びつき布置を形成する。そしてその布置を解釈が瞬間的に結びつき布置を形成する。そしてその布置を解釈が瞬間的に結びつき布置を形成する。そしてその布置を解釈がいて形象は文字のごとき記号連関であり形象とテクストの記号として、全体が完全な形で同時に提示されると考えら的記号として、全体が完全な形で同時に提示されると考えらいないが、しかし種々の形象現象の中の内的対立を記述しコいないが、しかし種々の形象現象の中の内的対立を記述しコいないが、しかし種々の形象現象の中の内的対立を記述しコンテクストへと置換しうる強みがある。

とするリアリズムに対して、現実をイデオロギー化して視覚遡る。アドルノは形象を現実の忠実な再現描写あるいは複写ント、さらには礼拝に形象は余計なものとしたルターにまでント、さらには礼拝に形象は余計なものとしたルターにまでの系譜をシュヴェッペンホイザーは、聖俗権力による形象のの系譜をシュヴェッペンホイザーは、聖俗権力による形象批判

を全面否定しているのではなく、現実の複写として意識操作 ことでのみ示されると説く。しかしその際にアドルノは形象 ならず、ただ概念を通して現存するものを限定的に否定する 解釈しなおし、社会のユートピアは形象により描写されては は旧約以来の偶像禁止のモチーフを自らの社会哲学において 的無意識まで植民地化していると批判する。さらにアドル

4 る。彼らは知覚像には無意識下に概念的要素が含まれている おいて人が判断する際の知覚・表象・概念の関係を論じてい ドルノは『啓蒙の弁証法』中の「反ユダヤ主義の諸要素」に 社会病理の形象としての投影像 ホルクハイマー シア

とシュヴェッペンホイザーは言う。

真正な表現としての形象は擁護していることに留意すべきだ を行う仮象に限定して否定し、自律的芸術において現象する

にパラノイアに駆られている時代にあっては投影のない知覚 も認識することに努めることで、暴力や支配とは無縁の形象 した反省に基づいて自己の世界像を相対化し他者の世界像を など存在しないという事実すら歪曲される危険がある。こう よび構成が行われていることを明らかにする。社会が組織的 とではなく、そこには投影すなわち能動的解釈や秩序付けお ことに注目し、知覚とは単に外的印象を受動的に記録するこ

を持ちうる。

(5)

復強迫 ケ(一九四八~)は『啓蒙の弁証法』中のニーチェ 文化形成に関わる生ける lebendig 形象とトラウマの反 批判理論を標榜する哲学者クリストフ・テュル やフロ

なる役割を演じている。表象や思考の基礎となる心的形象 その恐怖は徐々に象徴化されていき、その際に形象性が鍵と ることで耐えられるものにしてきたという。文化形成過程で 古に経験した自然の恐怖を、人類は記憶を通じて現前化させ 判理論の形象概念をさらに拡げている。テュルケによれば太 イトに関する記述から着想を得た生贄の文化理論において批

mentales Bild は幻覚に由来するとテュルケは考え、幻覚は

然から受けた太古の恐怖の経験(トラウマ)を様式化して繰 という儀式の場であった。生贄を捧げるという形をとって自 華させるための社会的文化的空間こそが生贄をささげる祭壇 期症状とされる。その幻覚を明確な輪郭をもつ表象像へと昇 神経を昂ぶらせる刺激を視覚的形態で心的に表象する際の初

#### 批判理論が重視する形象の非同一 性

ンヤミンやアドルノの考える形象はカントの唱えた図式

り返すなかで、文化が形成されてきたとテュルケは考える。

3

86

3

考えられる。さらにシュヴェッペンホイザーはコミュニケー

ョンの批判的解釈学」なるものも提唱しており、今後の研

ン論的視点も形象論に導入して、「視覚的コミュニケー

れたものとして記述することだという。 構造を解明することこそ、 は言及し、直感的視覚的形成物の根底にある弁証法的な概念 Schematismus に類似している点にシュヴェッペンホイザ 形象を文字のごとき記号で媒介さ

類できる。心的表象は内的形象と、 Vorstellung も複雑に関係しており、 出すことができる。形象はまた代理表象 Repräsentation と 的に構成されたものでもあり、そこにも形象の非同一性を見 形象は決して単にミメーシス的なものではなく、常に合理 描写 Darstellung、 表象は三つの相、 代理Stellvertretungに分 描写は複製的形象と、 つまり心的表象 代

は記号としての形象とそれぞれ関係している。

論的観点と現象学的観点とを架橋する役割を果たしていると めぐる議論に見られる両極端な見方、 はこの非同一的な形象概念を提示することで、今日の形象を 能なもの Objekt でもある点に端的に表れており、 う単なる情報媒体であると同時に、 批判理論の重視する形象の非同一性は、 現象学が唱える視覚可 互いに排斥しあう記号 形象が記号論の 批判理論 V

究が期待される。

おわりに

1

拠した形象論を見てきたが、アドルノら批判理論第 これまでシュヴェッペンホイザー父子による批判理論に依 世代

を広げて形象を論じている姿が浮き彫りになる。ベンヤミン 的行為の理論も含めて、社会学や社会心理学の領域にも視野 に属す子のゲルハルトはハーバーマスのコミュニケーション 概念との関係において論じているのとは対照的に、 として認識論的考察に重きを置いてオーソドックスに形 講筵に列した父のヘルマンは哲学と美学の領域にわたって主 第三世代

捉え方に対して、 可視化するものへと還元する昨今の形象論に見られる単層的 関係に着目する。そして形象を単なる記号、 同一性に求め、現にある状態と可能な状態との弁証法的緊張 論じているヘルマンに対して、ゲルハルトは形象の特性を非 形象におけるズレや差異に着目して形象を あるいは視覚を

質を開示する形象すなわち「弁証法的形象」に力点を置 らの認識論を引き継いで認識のユートピアを名に見出し、

いって

87

論の強みがあると考える。形象をより広い学問的背景のもと

まさに多層的に捉え得る点にこそ、

批判理論に依拠した形象

することを旨とする批判理論を標榜する理論家に課せられたのではなく、常に自己や現状に対して反省的・批判的に関与させていくことこそ、ただ理論を無批判に引き継ぎ墨守するで捉え直し、時代のアクチュアルな要請に応えて理論を展開

課題だと考えられる。

(一) Hermann Schweppenhäuser: Dialektischer Bildbegriff und dialektisches Bild' in der Kritischen Theorie. In:Denkende

註

Anschauung - anschauendes Denken. Kritisch-ästhetische Studien über die Komplementarität sensitiver und intellektiver Relationen. LIT Verlag(Münster), 2009. SS.57-98.

(2) Gerhard Schweppenhäuser: Die Nichtidentität des Bildes — Zum Bildbegriff der Kritischen Theorie. In:Bildstörung und Reflexion. Studien zur kritischen Theorie der visuellen Kultur, Könighausen& Neumann(Würzburg), 2013. SS.148-169.